保育園事業所の新たな挑戦

石郷岡しずか（センター事業団保育園事業所）

社会の変化と働く女性

私が高校を卒業を迎えようとしたころ、大学へ行きたいと父親に話しをしたとき「女は大学なんかいかなくていい」と、一喝されてしまいました。

1960年代後半は女性が働くこと、学ぶことがまだまだ希少価値の時代でした。大半の女性は、結婚の条件によって将来が決定するような世の中の流れでした。そんな中で私は結婚をしても働き続けたい。働き続けられる職業につきたいと思いながら国家試験で保育士の資格を取り、結婚、子育てをしながら保育の仕事を続けました。

我が家には4人の子どもがいます。長男が小学生の頃、子育ての状況がいちじるしく変わり始めました。このころ長男のクラスには3人兄弟4人兄弟も決して珍しいという状況ではありませんでした。

しかし、今20歳の末子の小学生時代には1人っ子がクラスの中で半数近くになっていて、一人っ子は決して珍しいという状況ではなくなりました。

1960年から83年までの間に働く女性が倍増しました。また、息子たちが小学生のころから少子化とともに、高学歴社会になってきて多くのこどもたちが大学を目指す社会になってきました。

特に女性の高学歴化が進む一方で、小さいころから「勉強しなさい」と言われながら成長し、小さい子どもと関わる経験が少ないまま大人になる女性が増えてきました。

このような子育て社会の流れは、私の周囲を見回すだけでもが同様な現象が生まれています。

働く女性の増加は、結婚だけではない人生設計を選ぶ可能性や、家庭という枠組みにとらわれず、新しい人間関係を作り、ヒュウマンネットワークを生み出す時代になっているのでしょうか。

少子化が深刻になってきた1994年厚生省でエンゼルプランが制定されました。

（今後の子育て支援のための基本的方向について）

①安心し出産や育児ができる環境を整える。

②家庭における子育てを基本にした、「子育て支援社会」を構築する。

③家庭における子どもの利益が最大限尊重されるよう配慮する。

という三つの基本視点に立ってさまざまな

子育て支援がはじまりました。

1999年には、女性が一生のうちに産む子どもの数は平均して1.3人と年々減少傾向を示しています。結婚しない女性の増加、結婚しても子どもを生まない人生設計、そして少子化、とこれまでとは違った家族関係の中で子育ての状況も変わってきています。

私が子育てをしていたころから少しずつ、核家族家庭が増え、育児を伝える家族関係も変わってきました。子育てを支える夫も残業で子どもの寝ている姿しか見られないほど仕事の追われ、たった一人で子育てに奮闘する女性も増えています。夫や実家に子育てを求めるのは物理的に難しいと思う妻は多く、新しいネットワークを人間関係に求める人が増えています。

保育園事業所の変化

このような社会状況の中で保育園事業所の組合員のおかれている状況も変わってきました。めざましく変化する世の中の流れに私たちも気づかないわけには行かなくなったのです。それは、東京都老人医療センターや日大病院の委託の院内保育園から、「自前の保育の仕事を」と在宅保育支援事業『あざみ』をたちあげ、手探りの中子育て基金の助成金で育児サポーター講座を開いたことがきっかけです。

受講生がシッターとなり、『あざみ』の在宅保育支援の活動を繰り広げ、東京都や板橋区に、育児サポーター講座の講師をお願いしたり、いろいろな支援を求める中で委託の仕事が入ってきました。

2001年に東京都児童会館のびのびひろば（2階部分）2002年に板橋区板橋第一小学校内学童クラブ、2003年板橋区志村第一小学校内学童クラブと3年間の中で委託事業が広がってきました。

「どんぐりのおうち」開設

板橋区では、2003年の次世代育成支援対策推進法案施策を踏まえ私たち団体に地域における子育て支援「親子ひろば」を作らないかとの話が持ち上がってきました。板橋区では待機児童が多く、公立保育園で一時保育や地域の乳幼児のための『遊ぼう会』『学童保育室ののびのび広場』などを行っていますが区民の需要は増大する一方です。このような状況の中で、家庭での子育てから地域・社会での子育てへもっと子育てが楽しめるよう親子のひろば「どんぐりのおうち」を開設ことになりました。

この事業は板橋区はつらつ親子のひろば事業として、板橋区とパートナーシップの関係を深めながら作る事業です。運営は行政、地域、との関係を大切にし、『参加、協同、共育ち』をテーマに取り組んでいきます。「どんぐりのおうち」の事業は、いつでも気軽に遊びにこられるひろば、大人も子どももほっとする居場所、として日常運営を行う中で、お話会や絵本の読み聞かせなど、を行う日を設けます。

また、就労支援としたパソコン講座やヘルパー2級講座、子育ての身近な悩みや疑問に答える気軽に参加できる講座を企画します。さらに、母親のリフレッシュや就労支援の支援対策とした一時保育、待機児童が増えつづける学童保育の夜間保育を行います。これらの事業をもとに地域に根を張って、子育て支援サービスから総合的な家庭支援の拠点としての役割を担う、保育

園事業所がはじめて作る地域福祉事業所です。

「どんぐりのおうち」が地域社会の中で子育て家庭の支えとなり、初めてお母さんになる人、子育ての不安、子育てと一緒に高齢者を抱えていたり、とさまざまな問題について地域とともに考え支える人材を育てていきます。子育ては決して一人ではできない。社会が担う役割を果たすために、充実した子育て支援が必要となっています。

子育ての生活総合支援センターを

一時保育制度は、「新エンゼルプラン」平成16年度目標値である3,000箇所（全国）にまだまだ各自治体は達成できない状況です。新エンゼルプラン施策では、保育園が受け皿を広げることや、専門のケアワーカーの育成など一定の予算がつけられましたが、それでもいまだに老人福祉に比べて児童福祉が立ち遅れています。

2003年、労協は立川市からの「子育て調査」を受託しました。保育園事業所は病院の院内保育園から学童保育、子育て支援、調査と保育事業の内容が多様化してきました。保育事業を20年続けてきた中で、保育だけしかできないという悩みを組合員が支えあいながら新しい事業を取り組もうと歩み始めています。

今年度の事業計画を組合員自身が自分たちで「食、高齢者を含めた子育ての生活総合支援センター」をつくろうと目標を描いています。これは自分たちの仕事の到達点を手探りの中で描き始めた一歩と私は考えています。

大人も子どもも手を結び合い

今から20年前保育園を受託し、歩んできた道のりは決してまっすぐではありませんでした。労協に疑問を持ったり、希望をなくしてり、仕事と育児の負担に負けそうになったり、働く女性の困難さを自分たちも抱えながら、目指すものをやっと見つけ描き始めたのです。

私たちは「どんぐりのおうち」を地域の目線から見つめ、子どもやおかあさん、おとうさんが「こんな施設があったらいいな〜」という未来を描くことのできるひろばにしていきたいと胸をわくわくさせながらオープンにむけて計画を練っています。

労協センター事業団が今年度の事業計画のなかで市民と一緒に作る労協運動を作ることを目標としています。運動により社会の流れを変える大きなテーマの中で私たちの力はささやかやものですが、一人が声を出すことで勇気付けられる人は多数いると思います。

子どもたちが手を差し出し、握り返すことで暖かさが伝わってきる、こんな経験を保育の中でいつも味わっていた保育園事業所の仲間たちだからこそ、大人も子どもも手を結び合える関係を大切にすることを子育てや介護の世界の中で忘れてはならないと思います。

みんなと一緒に歩んでいきたいと思います。